

## 初めての場所 II

久良岐乳兎院

長谷川 正弘

前回の『初めての場所』では、実際のある日ある時の「初めての寺を巡る」と云ったテーマに従って動いた数日の行程を初めてだらけで再現しましたが、一方で毎月初めの場所をコースには織り交ぜるようにもしており、その後二度目にまだ行けてない個所を拾っても結構多くあります。ある時期まで当然回数も少なく、超イベント的に何年か一回か、十何年か一回しか行けなかった京都・奈良に、最近は8、9年前の病氣前後から年に数回は行けるようになりました。いつか書きましたが、同行者が比叡山に関わりを持って以降からの事だったのかと思います。行く気になれば女性一人でも行けて、それほど遠い存在でもなく、気軽に行ける場所との認識が生まれた様な…。何にしろ、日曜日に仕事を終えてからでも行ける場所になったのですから…。それまでは、「京都・奈良と云えば此処」みたいなのに、久しぶりと云う事もあって、お気に入りです。そこしか知らず同じ所ばかりに行っていた気がしますが、最近は初めての場所にも興味をもち、お気に入りの寺社も増え、更に弘法大師所縁の寺などとテーマを決め、興味を持てば、ややマイナーな寺社にも欲を出して行くようになり、京都・奈良の認識の幅が広がり始めている訳です。

さて、こうして比較的最近知って行けた、当時としては初めて(その後2度目、3度目と続けて行くこともあるが…)の京都の寺社等をちょっと挙げてみましょう。因みに、ツアーで行っただけの場所は一回目とも言いがたいので省きます。既に作文になっている所もありますが、書いたことのない所も沢山あります。前回掲載の毘沙門堂・勸修寺・三井寺／壬生寺・法金剛院・神光院・桂春院の他／随心院／金戒光明寺・真如堂(真正極楽寺)・そこからの『哲学の道』への京都市街／新(いま)熊野神社・新熊野神社から今熊野親音寺(泉涌寺境内)までの道中の市街・今熊野親音寺そして泉涌寺境内全域／建仁寺塔頭西足院・京都大仏跡・方広寺・豊国神社・養源院・智積院／涉成園(東本願寺別邸)／正伝寺・常照寺・源光庵・光悦寺(鷹峯辺り)／大原野神社・勝持寺・正法寺・金蔵寺・十輪寺(大原野辺り)／興聖寺・恵心院・宇治神社・宇治上神社・三室戸寺・岩清水八幡(洛南辺り)／高山寺・西明寺・神護寺・それと清滝川沿いの東海自然歩道等々。

こうして見ると、そこまで行っていて何で〇〇は…?の様などころもあります。醍醐寺の上醍醐寺などは、軽く登山でもあり、ちょっと足ごしらえも悪く、覚悟不足でパスしてきたり(但し、前回掲載済み)、道に迷ってのロスタイムで最後の一ヶ所に行けなかった所、コース考案上中途半端に取り残されてしまった場所もありますし、敢えてそこを外しはしたものの次の番が回ってこない等々…、前掲の勸修寺の様に残りになります。例えば、大原野では勝持寺・大原野神社・願徳寺を経て金蔵寺から善峯寺・十輪寺を指して歩きに歩きましたが、二月の冷たい雨の降り出す曇天の中、荒れた東海自然歩道(ゴミ捨て場と化していた)を歩くのも厳しく、また道路工事で通行不能、コースを変えて迷子になり、下った事により最後に予定していた十輪寺に先に何とかたどり着き(途中、誰も歩いていない人に会えず、かなり下って、老人ホームのような施設でやっと訊ねることが出来ました)、行く予定であった善峯寺はバスも行かない時間(午後3時)になり、歩いては閉門時間(16時)に間に合いそうもなく志半ばにしては大袈裟ですが、断念せざるを得なくなり、十輪寺をじっくり堪能し、そこから当日最後の十輪寺迄の駅方向に下るバスに乗って帰りました。と云う訳で、スラスラ書いてはいますが、同行者との旅スラスラ行けている訳ではなく、実は結構珍道中で、サバイバルで、同行者とけんかをする程、極限的でもあったりして…、市街地なら訊ね様もありますが、例えば郊外のその大原野のような所は、大変でした…。それから、季節によって条件が異なることもあります。「条件ってなに」って思いでしようが、京都と謂えども、オールシーズンではなく、シーズンオフが在り、以前も書きましたが、二月中旬から三月中旬くらい、梅が散り櫻が咲きだすまでは、観光という点ではOFFの様です。ですから、その二月を盛り上げようと円山公園周辺東山辺りでは、イベントとして『花灯籠祭り』などを実施して集客を試みましたが、其れも逆に最近は三月中旬に移されて居り、どうせやるならもう少し観光客の多い時と考えたのでしょうか…。と云うことは、特に神社の梅も終わった二月は本当に人が来ないらしいです。公開していても冬場は閉門時間が一時間以上早まるし、バスの本数が減少する。シーズン便は休止期間であったり(八瀬叡山口からの叡山ケール等)、OFF期間中閉門の寺院(勝持寺など)が存在する等の事を知りました。確かに、京都の冬は寒い、その寒さの中、来るか来ないかも解らない気紛れな観光客を一日中待ってはられないのもよく分かりますから法事以外は閉門も理解できます。嘗ては、鎌倉辺りでも例えば見世物にしないとの気概からか円応寺や浄智寺や覚園寺などは長い事一般公開していませんでした。必ずしも公開しなければならぬとのルールはないのですから、マイナーな寺院は観光シーズンでない時はお休みがあってもいいのでしょうか。しかし一方で、…神社と寺院では在り様も違うように思いますが…。

実はここまで書いたのは、大分前と少し前の事で、それから改めて行けたところもあつたりします。この様に書きつつ、次を考えてもいるようで、ちょっと作文を温めている間に、もう一度行きたいとの想い募って実際に行ってしまった…は、よくあります。この作文は、そうした意味で、私にとっても都度祿の整理をし、次に繋げるのに大いに役立っていたのです。

既に、此処で作文させて頂いたものは兎も角、思い出しながら少し紹介してみましよう。ちょっと記憶に自信がなく、思い出すまで難航するかも……ですが、悪しからずご容赦ください。

まずは、新(いま)熊野神社から今熊野観音寺まで。新熊野神社、此処はタクシーの運転手さんに間違えて連れて行かれた場所。しかし、折角なのでしっかり拝観させていただきます。と云うのも間違えられたとはいえ、案内板を読むと由緒ある神社であり一見の価値はあったからです。因みに、何処と間違えられたかという点、次に書く今熊野観音寺で、ちゃんと「今熊野観音寺」と、お願いしたのですが、知らなかったのでしょうか……。場所的には間違えてはいますが微妙に近い関係で、歩いて行ける距離の間違えでした、がしかし一般の方々は怒る距離でした。さて、本神社は、京都熊野神社(平安神宮北西裏通り、在東大路通沿い西)、熊野若王子神社(哲学の道の南の起点)と併せて「京都三熊野社」と呼ばれている神社の一つです。従って、主祭神は伊弉諾尊(いざなぎのみこと)で神社本庁傘下でない独立神社です。後白河天皇は一一五五年に即位し一一五八年に退位しましたが、退位後も三十三間堂の東側にある法住寺にて院政を布き、「法住寺殿」とも呼ばれていました。その鎮守社としてこの新熊野神社が、鎮守寺として三十三間堂が創建され、造営の命を受けたのは、平清盛・重盛親子であったと云います。また一方、熊野三山を参拝する『熊野詣』が流行した平安末期、かといって当時の都人が熊野に参拝すると云う事は容易ではなく、熊野の神を京に招請せよと後白河上皇が平清盛に命じ、土や木材などを熊野から調達し造営したのが始まりとも言われています。ま、ですから由緒正しい訳です。本殿には熊野詣でよく見かけた八咫鳥(やたがらす)の垂れ幕があり、御神鳥として祭られて居り、御神木として本殿左右に植えられていたのは栂(なぎ)の木、古代南方からの大陸人の渡来と共にもたらされた、或る意味特殊な樹だけに、神木として大切にされてきたのでしょう。そのほか巨大な影向の大樟(ようごうのおおくすのき)が境内東大路通り脇にあり、グルッと回れるようにしてある簡易回廊を樹皮に触れつつ一周、日頃何のパワーも感じない私ですが、何か樟の氣を受けた気がしました。また、能楽の発祥の地でもあり、『能』と刻まれた記念碑もありました。能楽の祖、観阿弥・世阿弥親子がこの新熊野神社で「新熊野神事能楽」を披露し、これを見た足利(三代)義満は大変感動し、この親子に観阿弥・世阿弥と名乗らせるようになる機縁となった地でもあるそうです。そして、またまた誰も居ない静かな神社でもありました。

さて、随分時間をかけて本命でない新熊野神社を歩き廻った後は当日の本命であった今熊野観音寺を目指します。方向的には東大路通りの東、まずはその通りを渡り、森を目指して住宅街を東進。森とは泉涌寺境内の周囲を囲む森であり、その一部、北の外れに今熊野観音寺はあるはずなのです。すぐ隣の泉涌寺道を行けば良いのですが、それは泉涌寺本堂を目指すもの、位置的には新熊野神社の真東辺りが泉涌寺の森の北にあたりと読みましたので、普通の住宅街の道を時々現れる小さな寺などを覗きつつ進みました。ちょっと昇りすぎて行き止まり、戻って怪しげな道に入る。怪しげとは、住宅街の道ではなく、何となく山道の様な、犬の散歩に良さそうな、先に何かが在りそうな、そんな道と云うことです。確かに、途中犬の散歩のおじさんに二人ほどすれ違い挨拶しま

した。やがて、森に入り今熊野観音寺の赤いのぼりや会館風の建物が頭上、崖の上に見え始めます。鳥居橋の下をくぐって、グルッと回り込む様に昇り鳥居橋に出、鳥居橋を渡って境内へ進みます。泉涌寺にこんなところが在ったんだらうって感じ、思いの外広く、東は東山三六峰の一つ今熊野山山裾、もみじの森に囲まれていて、紅葉シーズンには混雑するのであろう事が想像できます。大きな恰幅の良い弘法大師の足元で見上げる女の子が3人、そんな「子護大師(こまもりだいし)」の銅像がドスンとあり、少し弘法大師のイメージが変わりそうな池田大作風な…。そう、此処は真言宗泉涌寺派のお寺です。此処もまた由緒正しく、小野小町や後白河上皇縁の寺となっているようです。因みに後白河上皇から賜ったと言われる山号は「新那智山」です。此の東大路通り界隈は法住寺を核に三十三間堂や新熊野神社や此処今熊野観音寺も後白河上皇に係わりのある寺社群であることが理解できました。ですから間違えられたとは言え、新熊野神社に行けたことは、知らなかっただけに良かったと思っています。本堂には秘仏、弘法大師御作と云われる身丈一尺八寸の十一面観音像が安置されています。その他、多宝塔・大師堂・ボケ封じ観音が在ったりと、多彩でした。此処も由緒自体が神仏習合で、東寺で修行の空海さんが、東山方向に光るものがあるのに気が付き、行ってみると老翁がおり、空海さんに十一面観音像と宝印を渡され、「一字を構え此の観音をお祭りし末世の衆生を救済せよ」と言い伝え去ろうとする老翁に誰かと尋ねると、「これから未来永劫この地を治めることになる熊野権現である」と…。さて、後白河上皇の頭痛を治したとの霊験もあり、頭痛封じともボケ封じとも云われるご利益があるとかで、我々もその目的で参拝に來たと思われているのかな？?と想ったりしました。枕宝布が授与品としてあり、これを枕カバーなどとしてつかうことで、御利益を受けることができるのか…。しかし、私は意地を張ったわけではありませんが、枕カバーは手に入れず、弘法大師の絵の刷られた「子護り」のお札を頂き、ちょっと前まで、六ツ川の自動火災通報装置の箱の上に置いてありました。中里の今は各部屋分はなく、また置き場所もなく『ハセガワ・ルーム』に放置されています。さて、此処今熊野観音寺も誰も居ないよう静かな中に幽寂を感じることができました。

その後は、泉涌寺境内もこれまで以上にゆっくり丁寧に拝観しました。以前は楊貴妃観音像を拝見するのみがテーマであった時もありましたので…。隣りの来迎院・善能寺・泉涌寺(本殿・雲明院・舍利殿・仏殿・雲龍院・心照殿・楊貴妃観音堂・大門)等。但し、泉涌寺道の両側にある塔頭は以前に夫々拝観したので省略、大門前で客待ち中のタクシィで次(伏見稻荷)へGO! ですからこれら泉涌寺道の両側の塔頭も初めて二度目はまだ行けていないお寺になるわけだ、とは今書いていて気が付いた次第です。

さて、次は金戒光明寺(こんかいこうみょうじ)と真如堂(しんにょどう)。一頃よく泊っていた東山を背景にした小高い位置にある宿から正面の小高い岡の中に三重塔を含む伽藍が見え、あれは「何に寺?」と行って見たくなったのが金戒光明寺、金戒光明寺の三重塔とは別に、以前の其処の三重塔にも惹かれていた真如堂との組み合わせである。もう一足のばせば、吉田神社も地域的には一括りにできたはずですが、例によってそこだけ外してしまっていて、何れそこだけを…とも思っている。それは兎も角、金戒

光明寺へ。法然上人が初めて草案を結んだ場所として知られる。しかし、金戒光明寺は当時大改修中で、山門からして工事中。山門を巻くように迂回し、墓地の縁を登る。段々墓地であり、その右手奥には、三重塔(文殊塔)がある。塔好きの私としては、当然接近してみる。近くに、會津墓地と云うものもあった。やや勉強不足にして、金戒光明寺がわかっていたいなかった。黒谷の金戒光明寺は幕末の会津藩と云うより幕府の第二の拠点であった。幕末の京都は暗殺や略奪の日常化する地域となっており、第14代將軍徳川家茂から当時の会津藩主松平容保(かたもり)を江戸へ呼び寄せ、京都守護職に任じたのが始まり。松平容保は何度か固辞はしたものの、最終的には藩祖保科正之以来の家訓に順じ受諾を決意した。家中に反対者もあったが、容保の「一死をもって」の決意揺るがず、結局、君臣一丸となって京都守護にあたることとなった。文久二年二月二十四日午前九時頃、京都三条大橋に、容保以下家臣一千名を率い到着、京都所司代・京都町奉行の迎えを受け、本陣と定めた黒谷金戒光明寺に至るまでの間威風堂々とした会津正規兵の行軍が一里余り続いた云々と。何故黒谷金戒光明寺が本陣に選ばれたのか。第一に城構えであった。そもそも徳川家康が京都守護に力を尽くし、二条城を作り所司代を置き、黒谷と知恩院をわからないように城構えとしたのである。因みに、黒谷に大軍が攻めてきたとしても、一度に入って来られないように、南には小門しかなく、西側には立派な高麗門が城門の様に在る。小高い岡のような地形自体が、天然自然の要塞といえる。第二に要所に近い。御所まで2km、京都三条粟田口(東海道の発着点)まで1.5kmと云う所謂要衝の地である。第三に千名の軍隊が駐屯できる。約4万坪と云う広大な寺域。野戦ではないため、宿舎が必要である。黒谷には大小52からの宿坊が在り、駐屯のためには大方便と宿坊25ヶ寺を寄宿のために明け渡したと文書に残されているようだ。以上3点の理由により、必然的に当寺が会津藩京都守護職の本陣として選ばれたのである。そして、新選組。会津守護の一翼を担い、京都市中を震撼させた新選組である。会津藩士は数で肅清し、新選組は行動派と云うか実動部隊として、暗殺をもって肅清した。従って、京都市民からも恐れられ、後に官軍と呼ばれる軍隊からは目の敵にされた。起こりは浪士組であったが、生麦事件を機に2分、清川八郎らは江戸に戻り(幕府側刺客により首、討たれる)、残留組の根岸友山・芹沢鴨・近藤勇・土方歳三らと袂を分けた。残留組の近藤・芹沢は黒谷で容保の拝謁がかない、さらに武家伝奏より『新選組』の命名とともに、市中取り締まりの命を受け、前述の通り京都市中を縦横無尽に走り廻り、治安は目立って回復。新選組の壬生の屯所と黒谷本陣との間では日々報告伝達が行われていた。一方、隊内の肅清も厳しく、結局は近藤・土方の新選組に集約されていく云々と云うわけで、黒谷金戒光明寺は間接的には私の興味の範疇である『新選組』と関係がある、と云えたわけだが視野が狭いというか、認識が狭いと云うか、都度資料を読みはしたが繋がりとして覚えていなかった。しかし東山山裾の宿から見えた事で私の認識が広げられた。

ですがしかし、残念ながら肝心の拝観については、改修工事中で殆どかなわず残念。次回は、会津藩や新選組ゆかりの地としての改めて黒谷金戒光明寺をゆっくり、見学してみたい。(前回掲載の通り紅葉の頃再度行け、山門にも昇り、伽藍も丁寧にみられた。特に、桜や紅葉のシーズンは特別拝観・特別公開等と銘打ってのイベントも多く、当所も全部見せます！風で十分に拝観できました。)

金戒光明寺北辺りから塔頭や墓地の塀に挟まれた裏道に抜けられ、その道沿い塔頭などを覗きながら金戒光明寺エリアを抜けると在るのが鈴聲山（れいしょうざん）真正極楽寺である。比叡山延暦寺を本山とする、天台宗のお寺である。真正極楽寺とは「全国各地に極楽寺はあるが、真正銘の極楽の寺は此処ですよ〜！」といった意味。真如堂とは、もともと本堂の愛称であった様だ。今から凡そ一千年前比叡山の戒算上人が比叡山の常行堂のご本尊阿弥陀如来（慈覚大師作）を東三条女院（藤原詮子。円融天皇の女御。一條天皇の御母）の離宮があった現在の地に移したのが始まりと云われている。一條天皇の勅許を得て本堂が創建され不断念仏の道場として念仏の行者や庶民、特に女性の信仰を得てきたとか言われている。それは、本尊である阿弥陀如来は、「領き阿弥陀」とも呼ばれており、その謂われとしては、慈覚大師円仁が一刀三礼して彫刻したもので、完成直前に「比叡山の修行者の本尊となり給え」と言っていて白毫を入れようとする、その阿弥陀如来像は三度首を横に振って拒否された。「では、京の都に下って、一切衆生をお救い下さい。中でも女人等を救い給え」と言うと、その阿弥陀像は三度頷かれたと云う伝説があり、故に女性の信者が多いのである。本堂・三重塔・元三大師堂・開山堂などを拝観して回る。特に、三重塔は、本日の行程の第一目的でもあったので、何度も回ってみた。最近では、紅葉の名所として人氣が高まっているようで、多くの人が来るようだが、そうなると思はれ空しい感じになるような。ご開帳等も紅葉の時期に合わせるのが一般的で、講中の方が説明などもして下さるが、そうでない時は本堂にさえ上がれないような場所もある。真如堂はそうでもなかったが、静かでゆっくり楽しめた。終了後は、法然院を目指したく、哲学の道方向に出るため裏庭から住宅街に抜ける道があり、その狭い階段を下る。途中昇ってくる人に蛇がいた等と聞きつつ、梅雨時のやや湿った、土の崖を右手に見て琵琶湖疎水分水線方向、東に向かった。

ちょっと寄り道。法然院は記事としては取り上げて来ていなかったが、初めてでもないので省略。嘗ては、閉門されていて入れなかったが、娘と行った20年ほど前から拝観できるようになり、山門をくぐると参道の左右にかなりの高さに積み上げられた四稜台形の砂山2つ、白砂壇である。上面には刻印されたような落雁の表の様な、くっきりした波形が描かれ、水を表す砂壇の間を通ると云うことにより心身を清め浄域に入ることの意味するとか。当時は新鮮な驚きだったのを覚えている。JRの「そうだ京都市こう」のポスターにもなったことがあったはずで、それを見て行ってみたいと想ったわけで、その頃が公開の始まりではなかったのか。因みに、近くを琵琶湖疎水分水線が流れ、その両側には、関雪櫻（この近くに居を構えていた、橋本関雪と妻よねが、一九二一年に京都市に三百本の桜の苗を寄贈したのに始まる。寄贈の経緯は、画家として大成した関雪が、京都に対する報恩を考えた時、よね夫人が、桜の木を植えてはどうかと発案したのが始まりとか。当初のものはすでに樹齢尽き、代替わりしているが今尚桜並木の名所となっているのである。一の並木があるのは、櫻の回に書いた通りである。また、その縁に小道が作られていて、哲学の小径と呼ばれている。しかし、哲学の道、哲学の道とは言われるが、京都大学の哲学者、西田幾多郎や田辺元らが好んで散策し、哲学的思索を

巡らせた事からそう呼ばれているのだが、明治のころは文人の道などとも呼ばれ、周辺に多くの文人が住んでいたという。そもそも始まりは、琵琶湖疎水分水線の管理用通路として作られたもので、観光目的で作られておらず、この道を中心に歩けば左右に観光寺社が存在すると云うものでもなかった。観光的には熊野若王子神社から銀閣を目指す道であり、途中は閉門寺社が多く、所謂遊歩道または散歩道であった。最近では、小さな喫茶店やお土産屋さんもできては消えしているが、休める場所ができた。そこへ、法然院の公開。いろいろな意味で、画期的であったと思う。

さて、前回『紅葉の京都』に掲載の通り上醍醐寺にも行け、今どうしても死ぬまでに行きたい場所は、弘法大師所縁の志明院と行きそなたのままの善峯寺。単にまだ行けない、石峯寺と宝塔寺。此処は伏見稻荷参拝に体力を奪われすぐ近くなのに行けないからである。そして、そこも含め洛南の寺社。それから後白河法皇の法住寺。それから…それから…まだまだ死ぬない。